

令和 6 年 6 月 23 日現在

機関番号：12401

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20H04449

研究課題名(和文) 医療実践としての人工妊娠中絶の新たなフレーム構築 出生前検査とのかかわりから

研究課題名(英文) Construction of a new frame for abortion as a medical practice: in relation to prenatal testing

研究代表者

菅野 摂子 (Sugano, Setsuko)

埼玉大学・その他部局等・准教授

研究者番号：60647254

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 8,400,000円

研究成果の概要(和文)：様々な医療施設で働く産婦人科医へのインタビューを行い、出生前検査に対する慎重な姿勢、胎児の疾患が「わかってしまう」ことへの懸念、「異常」を発見して胎児治療に繋げる試みなど、多様な意見および経験を聴取できた。それに伴う胎児の疾患による中絶は、勤務施設や施術経験によっても考え方や対応に差が見られた。地域の公的な医療情報サイトによる母体保護法指定医師の配置の調査では、産婦人科以外がヒットするなど正確な把握は難しいことがわかり、産婦人科のホームページの内容との齟齬も見られた。海外三か国の調査では、リプロダクションや障害のある子どもの養育への政府によるサポートと女性の当事者性の高さが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究成果の学術的意義は、産婦人科医の間に出生前検査に対する意見の相違が大きく、検査そのものへの評価もまちまちであると把握できたことである。「妊婦の意思を尊重する」姿勢は共通しているものの、こうした違いは妊婦の意思決定に影響を与えていると思われる。中絶を希望し、自身で施設を検索する場合には、アクセスに大きな課題があることも明らかになった。

調査対象国では、妊娠・出産、場合によっては中絶に対する経済的支援があり、障害のある子どもの養育へのサポートが手厚い国もみられた。こうした社会状況は女性や一部の医師などによる運動が関わっていると同時に、女性の意思決定を支えることが示唆された。

研究成果の概要(英文)：Interviews were conducted with obstetricians and gynaecologists working in various medical facilities, and diverse opinions and experiences were heard, including cautious attitudes towards prenatal testing, concerns about 'knowing' foetal diseases, and attempts to detect 'abnormalities' and link them to foetal treatment. The associated abortions due to foetal diseases showed differences in attitudes and responses depending on the facility where they work and their experience of treatment. A survey of the placement of doctors designated under the Maternal Protection Act by local public medical information websites revealed that it was difficult to ascertain the exact number of doctors, with hits for non-obstetricians, and there were also discrepancies with the content of obstetrician and gynaecologist websites. Surveys in three foreign countries showed a high level of government support for reproduction and the care of children with disabilities and the high level of women's partyhood.

研究分野：社会学

キーワード：出生前検査 人工妊娠中絶 NIPT 羊水検査 リプロダクティブ・ヘルス/ライツ ドイツ アイルランド オーストラリア

1. 研究開始当初の背景

人工妊娠中絶（以下、中絶と記す）については、胎児の生命権か女性の自己決定権か、という生命倫理学をはじめとする学問上の議論が国内外を問わず続いており、日本も例外ではない。日本では、戦後から 1950 年代にかけて多くの中絶が行われた。出生数が約 173 万人だった 1955 年には約 117 万件の中絶が実施されたが、その後中絶件数は減少を続け、2022 年は約 12 万件となり、女子千人当たりの中絶実施率も 1955 年当時の 50.2%から 5.1%へと激減した。

また、1970 年前後には羊水穿刺をすることで胎児の疾患を調べる羊水検査が実用化され、胎児の障害がわかった場合に行われる中絶は選択的あるいは選別の中絶と呼ばれるようになった。産科医療は出生前検査を利用して胎児を直接の観察対象とし、胎児治療や安全な出産方法の選択および先天性疾患を抱える新生児の早期治療などが可能になったが、それと同時に古くから問題とされてきた中絶に再び光があてられるようになり、中絶の新たなフレームが求められる状況にあった。

2. 研究の目的

本研究は中絶に対する医療者、特に実際に手術を行う産婦人科医の経験および意識を調べることによって、出生前検査の出現により変容しつつある中絶の問題と課題を明らかにすることを目的とする。出生前検査には羊水検査の他、母体血を採取することで胎児の疾患の確率を算出する母体血清マーカーや NIPT、超音波検査も含まれる。さらにその背景となる母体保護法指定医師へのアクセスの容易さなどを把握することで、中絶をめぐる産婦人科医と女性の置かれている状況を俯瞰する。

さらに、中絶への（社会の）抵抗感と出生前検査の位置づけが類似しているものの、臨床現場での医療的対応の異なる海外の国との比較研究を行い、日本の出生前検査と中絶のありようを相対化し、その特徴を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 産婦人科医等へのインタビュー

産婦人科医のインタビューを主として実施した。ジェンダー、勤務先の病院の規模、宗教的背景などが多様になるよう意識しながら、スノーボールサンプリングを使い、慎重にリクルートを行った。補足的に、助産師と NIPT を受検した女性にもインタビューを行った。

(2) 母体保護法指定医師に関する量的調査

厚生労働省の医療機能情報提供制度に準じた医療サイトの検索機能を用いて、母体保護法指定医師が在籍する、と書かれている医療機関をピックアップし、記載されている HP を閲覧して中絶について言及があるか、さらにその言及がどのような内容かを調べた。さらに、指定医師の減少や高齢化など、妊婦が中絶にアクセスしにくい状況になっていないか、全国の 3 地域（都道府県レベル）の医師会の協力を得て、母体保護法指定医師の人数の変遷などを調べた。

(3) 海外との比較研究

カトリック教徒が多く同性婚につづき中絶容認が国民投票で可決されたアイルランド、中絶に対するカウンセリングが義務付けられているドイツ、2019 年にすべての州で中絶が合法化されたオーストラリアの三か国で調査を行った。これらの国は中絶への抵抗感が比較的大きいと思われ、他方で出生前検査が個人の選択として実施されている点で日本と類似しているが、現場の医療者や女性たちの思いを尋ね、日本の独自性と一般性を浮き彫りにしようと試みた。

4. 研究成果

(1) 国内の産婦人科医等へのインタビュー

国内調査で行った産婦人科医は合計 13 名であり、それぞれの属性と調査場所などについては表 1 の通りである。性別（性自認）は女性の方が多く、年齢コーホートの最多は 50 代だった。勤務先の種別は、病院勤務が 8 名、無床診療所が 4 名、有床診療所 1 名だった。出生前検査については、次の 4 グループに分けた。「A:出生前検査を主に取り扱っている」「B:出生前検査を実施し、中期中絶も行っており、本人希望の初期中絶も行う」「C:出生前検査を実施しているが、本人希望の初期中絶は基本的には実施していない」「D:出生前検査は実施していない」。なお、妊婦健診で実施される超音波検査は出生前検査に含めない。この 13 名には、主に出生前検査と中絶に関する経験と意見を聞いたが、医師としてのキャリアなども属性を補足する意味で尋ねた。その内容の中で重要と思われる項目をまとめて示す。

表 1 インタビュー協力者（産婦人科医）のプロフィール

| ID | 年代 | 性別 | 勤務先種別 | 母体保護法指定医師 | インタビュー方法 | 出生前検査 |
|-----|-----|----|-------|---------------|----------|-------|
| D01 | 40代 | 男性 | 無床診療所 | あり | zoom | D |
| D02 | 60代 | 女性 | 病院 | あり | zoom | C |
| D03 | 50代 | 女性 | 無床診療所 | あり | zoom | A |
| D04 | 30代 | 男性 | 無床診療所 | なし | zoom | A |
| D05 | 50代 | 男性 | 病院 | なし (以前はあり) | zoom | D |
| D06 | 70代 | 男性 | 有床診療所 | なし | 対面 | D |
| D07 | 50代 | 女性 | 病院 | あり | zoom | C |
| D08 | 60代 | 女性 | 無床診療所 | あり | zoom | D |
| D09 | 70代 | 男性 | 病院 | あり | zoom | B |
| D10 | 30代 | 女性 | 病院 | なし | zoom | C |
| D11 | 50代 | 女性 | 病院 | あり | zoom | B |
| D12 | 40代 | 女性 | 病院 | あり | 対面 | C |
| D13 | 50代 | 女性 | 病院 | あり | zoom | C |

医師としてのキャリア

産婦人科医になった理由として、親やきょうだいや産婦人科医あるいは他の専門の医師であること、先代より医業に携わってきたことをあげる人が一定数いた。女性の医師のなかには、女性に役立つ仕事であること、外科的な手技が使えることもできて女性の一生に関わりながら幅広い診療ができることを産婦人科の魅力としてあげる人もいた。さらに胎児治療や新生児医療へ繋げる実践について語る医師もいた。

出生前検査の経験と考え方

羊水検査は、他の出生前検査の結果より、追検査が必要となった場合に行う検査と位置付けている場合が多かった。また、羊水検査は胎児だけでなく両親の「染色体異常」がわかる検査であると説明している場合があった。受検時期は15~16週になるが、結果を受けて妊娠継続を決めた場合、その後の20週を継続できるかどうかを考えること、「異常」があったとしても産むと決めているのであれば受検しないことも選択にあると患者に伝えている医師もいた。

超音波検査は、所属する医療機関が導入している機器により検査の精度が左右されること、また、新しい機器では細かいところまで「見える」「分かってしまう」が、習熟度が低いあるいは経験が浅い場合は問題がない場合も問題があるかのように診断してしまうことへの懸念が述べられた。中期以降は、「今の赤ちゃんが今後どうなっていくのか」の予測を患者に丁寧に伝えるようにしているとした医師がいた。また、患者の夫が超音波検査の画面をともに「見る」ことは愛着形成あるいは父性形成のために良いと評価する医師もいた。

患者自身は「通常の妊婦健診」のつもりで受けたにもかかわらず異常が発見され、羊水検査へと至る例があるとする医師、18週頃に超音波検査で心臓の血管異常に関するスクリーニングをしているとする医師、NIPTをスクリーニング検査と位置付けることに疑問を呈する医師もいた。超音波検査を専門としている医師の在籍する医療機関では、超音波検査で細部まで調べながらも、羊水検査を受けるか否かを定める一種のスクリーニング検査として超音波検査が機能していた。

遺伝カウンセリングを産科医療から離して提供することや、検査後のみ提供することに対して、批判的な考えが複数あった。また、解釈の難しい検査結果が出た場合や家族性疾患のある場合は遺伝カウンセラーに任せ、各種検査の受検に関する相談は「お産に寄り添う」助産師や産婦人科医が受けるべきだとする医師もいた。NIPTによって「分かる」のは疾患の一部であるものの検査の普及により「今までに気づけなかったトリソミー」に気付けるようになるため、中期中絶は増えるのではないかとした医師が複数いた。また、NIPTの場合、実施が11週、結果が12週、羊水検査に進む場合は実施が16週、結果が18、19週目になるため「トータルで2ヶ月」の期間ずっと、中絶する可能性のある状態に置かれることを患者に伝えるとする医師もいた。

胎児治療・不妊治療

超音波検査によって「異常」を早期発見して胎児治療につなげようと努力する医師、自分は胎児ドックや胎児スクリーニング、胎児治療には関わらないだろうとする医師、胎児治療はできることが限られているのに期待されすぎているとした医師、早期に異常を見つけることによって治療ではなく妊娠中断(中絶)を選択する人たちが増えると気にかけている医師など、産婦人科医のなかでも胎児治療に対する姿勢の多様性が把握できた。

本調査の医師の不妊治療のかかわりは限定的であり、体外受精などの不妊治療を専門とする不妊(治療)クリニックでの妊娠が圧倒的に多いことがうかがえた。その上で、不妊治療によって妊娠した人は胎児の健康についての不安を抱えており、それが出生前検査の受検につながるという指摘や、不妊や不妊治療の経験が妊婦の不安に影響を及ぼしているという指摘があった。

年齢については、40歳代の方は出産を決めているために受検しないという傾向を指摘した人もいた。また30歳代前半はNIPTの費用が高いために、非侵襲的で費用が安価なクアトロテストを希望するという指摘もあった。NIPTを35歳以上の人に限ることについて、年齢依存の胎児の病気や異常は、胎児染色体のトリソミーやモノソミーに限られるため、トリソミーに対する偏見が助長され、年齢の基準を設けることも一つのレッテルをつくっているため、35歳以上だけに(NIPTによって)スクリーニングするのはやめたほうが良いと述べた医師もいた。

出生前検査と家族

医師は、夫婦での決断や協力して決定することを重視していた。可能なかぎり夫も巻き込むことで、妊娠中の不安や負担を妊婦一人に負わせることがないように、医師としてはカップルにかかわりをもち、働きかけをしていた。中絶の配偶者同意については、基本的には撤廃に賛成の医師が多いが、一方で、躊躇もみられた。リプロダクティブライツ(生殖に関する権利)については大前提としつつも、DV等の例外をのぞき、夫婦の子供である以上、パートナーの意向も重要だと考えている医師が多かった。出生前検査後の意思決定については、女性の意思決定を大前提としつつも、積極的に夫に生殖プロセスに関与させようとする姿勢が強調された。他方で、夫の理解不足や想像力の不足への批判的言及もみられた。超音波検診で、胎児を夫にみせることで当事者であることを意識化させる工夫をしていることを強調する医師も複数名みられた。

障害

患者には実際に障害のある子どもに接している人はほとんどいない、検査でわかる病気はわずかであり、成人してから判明したり発症するものもあるため「生まれてきて顔を見ればその子どもが持っている病気は許容でき、顔を見なければ許容できない」ことに「もやもや」とすると同時に「仕方がない」とした医師もいた。

障害のある子どもの成長については、産婦人科医は1ヶ月健診で子どもとの関係が途切れるが、かつて小児科が同じ施設内にある病院に勤めていた時期に、院内で寝たきりで大きくなった子どもが家族の一員として大切に育てられる様子を見て、自分は驕っていたと語った医師、障害のある子どもを持つ母親の会での様子から「一度しかない人生を生きるということの意味を考えさせられる」と述べた医師がいた。優生思想に関しては、「疾患を持った子どもを選択的に生まれさせないので、優生思想という批判は当然当たる。ただ個人個人の選択においては強く制限するべきではない」との考えや、「次世代シーケンサーが開発され、遺伝子変異は誰でも持っていると分かった。これをこれからの教育で伝えていくことが必要」との考えが示された。また「NIPTは先天性疾患のごく一部をターゲットにした検査という時点で倫理的ではない、優生思想である」とした医師もいた。

医師と患者

検査結果の待ち時間が不安や心配を引き起こすこと、検査でわかることの限界、精神的なサポートの必要性、医師と患者のコミュニケーション、高齢出産の増加に伴うリスク、夫の同席の重要性などが言及された。また、患者とのコミュニケーションにおいて患者が直面する倫理的・心理的な葛藤や、選択の難しさについて語られた。それぞれの医師は明確に自身の考えを述べたが、結論としては、医師の役割は患者とのコミュニケーションを通じて選択肢を提供し、患者が最終的な決定をする際にサポートすることが強調されていた。

中絶

胎児要件による中絶の実施については、医師が勤務している医院によって、施術の経験、対応に差があった。開業医では妊娠初期で経済的理由を適用し、大学病院については妊娠中期で母体の合併症等での実施経験が共通していた。胎児要件の中絶ができないことについて、胎児の障害の種類や重篤度・予後生命に考慮がないことへの疑問や、実際とは常に乖離した要件の適用が公表されていくのは本当の議論にもつながりにくい、と言及する声もあった。手技については、妊娠週数によって手技をかえている医師が多い。掻爬法が主流であることについて、病理検査の標本採取、流産の手術にも必要なので直視下での外科手術は医師が習得しておくべき最低限の技術、という見解もあった。中絶手術の説明は提供されているが、すでに意思決定を行っている方には実施時にあらためてしない、など医師の考え方によって対応の差があった。出生前診断の結果・対応の伝え方や、妊婦の精神的なケアにいかにか配慮すべきかの課題を感じている医師も多い。

また、中期中絶については、関わった中期中絶のすべてが染色体異常だったという発言がある一方で、アクセス面での課題が共通して語られた。中期中絶の経済的理由の適応は、医学的適応だけ行う大学病院では実施されず、開業医でも手間やリスクが大きく、中絶のベッドが割けないばかりか、隣で産声や祝福の声を聞こえるので、妊婦が非常に気の毒な状況になる、という意見もあった。

中絶薬については産婦人科の診療を前提にした導入を肯定する意見が多くあり、女性にとってメリットこそあれデメリットはないという賛成派の声もあった。この他、妊婦のおかれた状況や社会背景の関連からの関心・意見も多く出されており、なかには医師会の体制への批判もあった。

妊娠・出産全般

出生前検査ではなく妊婦健診の超音波検査によって胎児の疾患や異常が見つかるときがある。そのようなときに、医師は妊婦にいかにか情報を提供するのだろうか。これについては、その医療機関がいずれの出生前検査を実施しているか、臨床遺伝専門医や遺伝カウンセラーがいるか、遺伝カウンセリングの内容、その医療機関の地政学的な位置と妊婦の社会経済的な状況などによって、状況がかなり異なることがわかった。また、刑法墮胎罪、優生保護法、母体保護法に対する考えは、さまざまであった。

補足：その他のインタビュー

2名の助産師の調査では、両者とも妊婦を理解しようとする姿勢が強く、出生前検査と中絶についても妊婦に寄り添った意見が聞かれた。長らく助産師として働き、教育にも携わってきたM01さんは、病院の産科の助産師は中絶に関わる機会が少ないこと（それにもかかわらず出生前検査には携わる）、妊婦の出産に向かう気持ちは診療所と病院では異なるのではないかと、夫との

shared decision making をして欲しいことなど、経験を踏まえて語った。他方で、海外で助産師として活動する M02 さんは、当該国では助産師の権限が大きいこと、胎児のスクリーニングは無料のコンバインドテストだが、それは 60% くらいしか受けないこと、妊娠中の検査の受検や出産する場所、出産後の子育てが「あなた次第である」ことを妊婦に伝える大切さを語った。夫は妻の意思決定を支える立場であるという見方であった。

女性へのインタビューでは、W01 さんが NIPT の受検は海外で仕事をする夫とのやりとりが非常に困難で意思疎通が難しかったことや、出産後の生活が厳しいと見込まれる人にこそ出生前検査が必要なのではないかと訴えた。妊娠・出産全般においても、当事者である女性の意見が反映されていないのではないかと語った。W02 さんは、不妊治療を経ての妊娠であり、夫と合意して NIPT を受けることにしたが、もし陽性だったらどうするか、という点では意見が一致せず、結果が陰性だったので、そのままきってしまった、ということであった。出生前検査における意思決定の難しさを語った。

(2) 母体保護法指定医師に関する量的調査

2021 年 6 月から 2022 年 2 月 10 日まで、厚生労働省の医療機能情報提供制度のもと各都道府県が公開している医療情報サイトの検索機能を用いて、母体保護法指定医師が配置されていると書かれている医療施設を検索したところ、休診を除外して 4654 施設がヒットした。産婦人科/産科/婦人科(以降、産婦人科等と記す)を標榜している施設でもっとも多いのは東京都 414 施設、大阪府が第 2 位で 333 施設、続いて神奈川県が 247 施設だったが、産婦人科等以外の診療科、例えば内科、外科、歯科などを標榜している診療科を含めると、大阪府が 549 施設と 1 位になった。母体保護法指定医師は、産婦人科での実施経験などの条件を満たさなければ取得できない。他の診療科、特に免許の種類異なる歯科が混入していることは大きな問題である。また、実際に施設のホームページを見てみると、73%の施設に情報がなかったり、逆に「中絶手術は行っていない」などと書かれていた。中期中絶に至っては、中期中絶の情報が書かれているのは 4%、手術の実施が明記されているのは 3%であった。公的な医療情報提供システムでありながら、母体保護法指定医師の把握自体が正確とは言えず、アクセスの悪さが明らかになった。

また、3 地域における母体保護法指定医師の 10 年間の増減だが、人口の多い地域 A は 10%の増加、地域 B は 6.5%の減少、地域 C も 6%の減少であった。増加している地域 A において、20 代はゼロ、30 代は約 130 人であり、70 代以上の約 90 人より少ないものの、40 代、50 代、60 代のいずれに比べても少なかった。

(3) 海外調査(ドイツ、アイルランド、オーストラリア)

ドイツ

2022 年 10 月 4 日～10 月 14 日、滞在場所はベルリン都市州各所で 8 名にインタビューを行った。産婦人科医(専門医取得中を含む)はそのうち 4 名で、その他非営利シンクタンクのフェミニズムアドバイザー、訪日経験のあるフェミニスト(大学名誉教授)連邦平等基金代表(2 名)であった。出生前検査や中絶は一定の条件下では無料で提供される可能性もある。当時有料であった NIPT も翌年 7 月には無料との予定であり、受検については日本のような問題意識は見られなかった。むしろ、中絶自体が政治的な争点であるドイツは、医師に対する中絶の広告禁止の項目(情報提供の禁止)が撤廃される法律の変更があり、フェミニストによってその撤廃の議論にもつながる人工妊娠中絶法制の刑法からの削除が訴えられていた。

アイルランド

2023 年 3 月 10 日～14 日、滞在場所は首都ダブリンで 9 名(研究者 3 名、医師 2 名、看護師 1 名、胎児の致死的な障害を理由とした中絶経験者のグループの代表 1 名、女性障害者グループの代表 1 名、専業主婦 1 名) 帰国してから zoom で 2 名、合計 11 名のインタビューを行った。2018 年の憲法改正によりアイルランドでは中絶が可能になったが、1980 年代から続く草の根の市民運動が若い世代と合流し、「対話」や「体験の共有」などをキー概念として運動を作り上げたことが背景にあると語られた。また、合法化後の課題には、妊娠 10～12 週までの産科病院での中絶へのアクセスに医師不足等の課題があるとの指摘があった。

オーストラリア

2024 年 2 月 4 日～11 日、滞在場所はアデレードで 16 名にインタビューを行った。内訳は、看護師 10 名、医師 2 名、栄養士 1 名、市民 2 名、人文系研究者 1 名であった。オーストラリアはハーモニーテストという超音波検査と母体血清マーカー検査を組み合わせた検査が無料で行われているが NIPT は有料である。ハーモニーテストは多くの女性がルーチンで受けており、それに対する戸惑いや陽性だった場合の意思決定の困難を示したのは、クリスチアンの看護師と稀少疾患のある子どもを育てる 2 名のナースであった。他の人々は、出生前検査の受検や選択的中絶はあくまで個人の選択であると語っていた。その背景には、障害のある子どもを育てる家庭への継続的な経済的支援などの公的なサービスが充実していることが挙げられた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計38件（うち査読付論文 11件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 18件）

| | |
|--|--------------------|
| 1. 著者名 菅野 慎子 | 4. 巻 43 |
| 2. 論文標題 中期中絶の問題性 | 5. 発行年 2024年 |
| 3. 雑誌名 立教社会福祉研究 | 6. 最初と最後の頁 3-11 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 菅野 慎子 | 4. 巻 51 |
| 2. 論文標題 「女性の健康」の隘路とフェムテック | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 現代思想5月号 | 6. 最初と最後の頁 58-67 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 二階堂 祐子・柘植 あづみ | 4. 巻 162 |
| 2. 論文標題 アイルランドの中絶合法化運動に見る多様なアクターと社会的政治的課題 | 5. 発行年 2024年 |
| 3. 雑誌名 明治学院大学社会学・社会福祉学研究 | 6. 最初と最後の頁 195-229 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 洪 賢秀、小門 穂、柘植 あづみ | 4. 巻 33(1) |
| 2. 論文標題 提供卵子による生殖補助医療の経験における迷いと悩み Webアンケート調査結果より | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 生命倫理 | 6. 最初と最後の頁 79092 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 柘植あづみ | 4. 巻 11 |
| 2. 論文標題 出自を知る権利 提供精子によって築かれた親子関係と社会課題 | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 雑誌『世界』 | 6. 最初と最後の頁 141-146 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-------------------|
| 1. 著者名 齋藤圭介 | 4. 巻 21 |
| 2. 論文標題 会員文献紹介『射精責任』 | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 国際ジェンダー学会誌 | 6. 最初と最後の頁 133 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 佐野敦子 | 4. 巻 22 |
| 2. 論文標題 ドイツにおけるリプロダクティブ・ヘルス&ライツをめぐる医療実践と課題ー人工妊娠中絶をめぐる医師の語りから | 5. 発行年 2024年 |
| 3. 雑誌名 21世紀社会デザイン研究 | 6. 最初と最後の頁 81-95 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|----------------------|
| 1. 著者名 佐野敦子 | 4. 巻 25 |
| 2. 論文標題 アフター・メルケルのジェンダー平等推進ー連立政権が掲げた交差的フェミニズムの課題は何か | 5. 発行年 2024年 |
| 3. 雑誌名 立教大学ジェンダーフォーラム年報 | 6. 最初と最後の頁 91-104 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 二階堂祐子 | 4. 巻 43 |
| 2. 論文標題 アイルランド共和国における妊娠中断規制法の成立とリプロダクティブ・ヘルスをめぐる国民投票運動 | 5. 発行年 2024年 |
| 3. 雑誌名 エール：アイルランド研究 | 6. 最初と最後の頁 32-38 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|--------------------|
| 1. 著者名 佐野敦子, 菅野摂子 | 4. 巻 39巻 |
| 2. 論文標題 ドイツの出生前検査における情報提供の課題 NIPT (Non Invasive Prenatal genetic Testing) の保険適用をめぐるアクティビストの語りから | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 東京大学大学院情報学環 情報学研究 調査研究編 | 6. 最初と最後の頁 1-42 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 佐野敦子 | 4. 巻 21 |
| 2. 論文標題 新政権の公約からみるドイツのリプロダクティブ・ヘルス/ライツの方向性 「中絶は罪」を前提とした議論と相談体制を見据えた考察 | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 21世紀社会デザイン研究 | 6. 最初と最後の頁 19-31 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 三枝七都子, 武内今日子, 石黒真里, 菅野摂子 | 4. 巻 20 |
| 2. 論文標題 母体保護法指定医師へのアクセシビリティー医療機能情報提供制度を用いた母体保護法指定医師が配置されている医療施設の調査 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 国際ジェンダー学会誌 | 6. 最初と最後の頁 165-175 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 柘植あづみ、齋藤有紀子 | 4. 巻 53 |
| 2. 論文標題 NIPT（非侵襲的出生前遺伝学的検査）の臨床応用をめぐる議論 私たちが関連医学会に提言を送付した理由 | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 明治学院大学社会学部附属研究所研究所年報 | 6. 最初と最後の頁 17-35 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 芦野由利子、大橋由香子、柘植あづみ | 4. 巻 161 |
| 2. 論文標題 優生保護法から母体保護法への「改正」におけるリプロダクティブ・ヘルス/ライツをめぐる攻防 堂 本暁子元参議院議員に聴く | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 明治学院大学社会学・社会福祉学研究 | 6. 最初と最後の頁 291-320 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である） | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 柘植あづみ | 4. 巻 50 |
| 2. 論文標題 ヤングケアラーと出生前検査の調査が可視化する「閉じた家族」 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 現代思想 | 6. 最初と最後の頁 155-164 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-------------------|
| 1. 著者名 齋藤圭介 | 4. 巻 35 |
| 2. 論文標題 解題「理論という実践」 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 年報社会学論集 | 6. 最初と最後の頁 1-4 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 菅野 椋子 | 4. 巻 2022 |
| 2. 論文標題 リプロダクティブ・ヘルス&ライツと国内外の中絶対応 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 女性白書 | 6. 最初と最後の頁 36-40 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 Tsuge, Azumi | 4. 巻 26(2) |
| 2. 論文標題 Women's decision-making and their experiences in the changing socio-technical system of prenatal testing in Japan, 1980s to 2010s | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 ICON: The Journal of the Internatinal Comitte for the History of Technology | 6. 最初と最後の頁 62-80 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 柘植あづみ | 4. 巻 7 |
| 2. 論文標題 NIPT等の出生前検査に関する倫理的課題と社会的課題について | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 母子保健情報誌15 | 6. 最初と最後の頁 15-19 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 佐野 敦子、サノ アツコ | 4. 巻 20 |
| 2. 論文標題 ICTがリプロダクティブ・ヘルス/ライツに与える影響：ドイツにおける妊娠中絶をめぐる法改正と女性運動の考察から | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 21世紀社会デザイン研究：Rikkyo journal of social design studies | 6. 最初と最後の頁 57～71 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14992/00021446 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 佐野 敦子 | 4. 巻 24 |
| 2. 論文標題 COVID-19がジェンダー施策に与える影響 ドイツの男女平等戦略を巡る現状報告 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 ジェンダー研究 : お茶の水女子大学ジェンダー研究所年報 | 6. 最初と最後の頁 57 ~ 65 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.24567/0002000110 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|--|-------------------------|
| 1. 著者名 齋藤圭介 | 4. 巻 63 |
| 2. 論文標題 第12回/最終回 社会調査で得られる社会像 と リアルな社会 のあいだに生じる不可避のズレ | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 Journal of the Atomic Energy Society of Japan | 6. 最初と最後の頁 496 ~ 496 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3327/jaesjb.63.6_496 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|--|-------------------------|
| 1. 著者名 SAITO Keisuke | 4. 巻 72(4) |
| 2. 論文標題 生殖における男性の当事者性・再考 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 Japanese Sociological Review | 6. 最初と最後の頁 467 ~ 486 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4057/jsr.72.467 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 菅野 慎子 | 4. 巻 32(1) |
| 2. 論文標題 スクリーニング検査と受検者の視覚 二つのスクリーニング検査をめぐる当事者の語りから | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 保健医療社会学論集 | 6. 最初と最後の頁 45-54 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 菅野 椋子・田中 慶子 | 4. 巻 51(5) |
| 2. 論文標題 出生前検査に対する一般社会の認識 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 周産期医学 特集「これからの出生前遺伝学的検査を考える」 | 6. 最初と最後の頁 701-704 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-------------------|
| 1. 著者名 菅野 椋子 | 4. 巻 18 |
| 2. 論文標題 特集：デジタル化はジェンダー平等に寄与するか「特集にあたって」(巻頭言) | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 国際ジェンダー学会 | 6. 最初と最後の頁 5-7 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 Chia-Ling, Wu, and Jung-Ok, Ha, Azumi Tsuge | 4. 巻 14.1. |
| 2. 論文標題 Data Reporting as Care Infrastructure: Assembling ART Registries in Japan, Taiwan, and South Korea, East Asian Science, Technology and Society | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 An International Journal, Duke University Press, | 6. 最初と最後の頁 35-59 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1215/18752160-8233676 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 該当する |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 山中 美智子、吉橋 博史、本田 まり、水野 誠司、柘植 あづみ | 4. 巻 7 |
| 2. 論文標題 出生前検査と遺伝カウンセリング：過去～現状～未来に向けて | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 聖路加国際大学紀要 | 6. 最初と最後の頁 76-85 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34414/00016401 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 柘植あづみ | 4. 巻 59 |
| 2. 論文標題 性と生の人権としての性教育をめざして | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 児童心理学の進歩 | 6. 最初と最後の頁 205-210 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 佐野敦子 | 4. 巻 19 |
| 2. 論文標題 メルケル政権下の男女平等報告書とドイツ初の男女平等戦略 時代の転機を次の社会のデザインにつなげるには | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科 | 6. 最初と最後の頁 16-29 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 佐野敦子 | 4. 巻 11 |
| 2. 論文標題 国立女性教育会館におけるeラーニング事業 第4期中期計画の取組と今後の展開にむけた課題 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 NWECA実践研究 「学校教育とジェンダー平等」 | 6. 最初と最後の頁 186-202 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 佐野敦子 | 4. 巻 18 |
| 2. 論文標題 ジェンダーからみたAI戦略 - ドイツのデジタル変容とジェンダー平等推進 - | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 国際ジェンダー学会誌 | 6. 最初と最後の頁 39-63 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 Atsuko, Sano | 4. 巻 88 |
| 2. 論文標題 E-LEARNING AND GENDER A PROPOSAL FOR THREE TYPES OF COLLABORATION | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 The Digital Transformation Implications for the Social Sciences and the Humanities, Miscellanea, | 6. 最初と最後の頁 20-23 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 齋藤圭介 | 4. 巻 33 |
| 2. 論文標題 男性の生殖経験とは何か 育児に積極的にかかわっている男性へのインタビュー調査から | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 年報社会学論集 | 6. 最初と最後の頁 157-168 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|---|-------------------------|
| 1. 著者名 齋藤圭介 | 4. 巻 62 |
| 2. 論文標題 第9回 学生にとって、社会調査の魅力とは何か | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 Journal of the Atomic Energy Society of Japan | 6. 最初と最後の頁 294 ~ 294 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3327/jaesjb.62.5_294 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-------------------------|
| 1. 著者名 齋藤圭介 | 4. 巻 62 |
| 2. 論文標題 第10回 質問紙調査の魅力と落とし穴 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 Journal of the Atomic Energy Society of Japan | 6. 最初と最後の頁 401 ~ 401 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3327/jaesjb.62.7_401 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-------------------------|
| 1. 著者名 齋藤圭介 | 4. 巻 62 |
| 2. 論文標題 第11回 社会調査とプライバシーの微妙なバランス | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 Journal of the Atomic Energy Society of Japan | 6. 最初と最後の頁 606 ~ 606 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3327/jaesjb.62.10_606 | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-------------------|
| 1. 著者名 齋藤圭介 | 4. 巻 156 |
| 2. 論文標題 研究例会 理論という実践 ジェンダー理論は社会正義を語るか (企画趣旨文) | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 関東社会学会ニュース | 6. 最初と最後の頁 4-5 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

[学会発表] 計45件 (うち招待講演 13件 / うち国際学会 12件)

| |
|---|
| 1. 発表者名 菅野摂子 |
| 2. 発表標題 中絶をめぐる医療・社会 (3) 出生前検査に対する躊躇と中絶への態度 |
| 3. 学会等名 第96回日本社会学会 |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Setsuko SUGANO |
| 2. 発表標題 Attitudes of Obstetricians and Gynecologist towards Prenatal Testing and Abortion in Japan |
| 3. 学会等名 XX ISA World Congress of Sociology (国際学会) |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 菅野 慎子 |
| 2. 発表標題 人工妊娠中絶をめぐる社会運動と法制度 日・独・英・アイルランドの女性の中絶経験の表現と社会運動 「日本の中絶の語りを通して」 |
| 3. 学会等名 第49回日本保健医療社会学会大会 |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 菅野 慎子・佐野 敦子 |
| 2. 発表標題 ドイツの政権交代とリプロダクティブ・ヘルス&ライツ ードイツの産科医療の概要ー |
| 3. 学会等名 PND研究会（信州大学）（招待講演） |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 柘植 あづみ |
| 2. 発表標題 大会長講演「「生き延びる」ための生命倫理 生殖技術を題材に」 |
| 3. 学会等名 日本生命倫理学会第35回年次大会 |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 柘植 あづみ |
| 2. 発表標題 シンポジウムオーガナイザー「着床前遺伝学的検査（PGT-M）の倫理について考える」 |
| 3. 学会等名 日本生命倫理学会第35回年次大会 |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 齋藤圭介 |
| 2. 発表標題 中絶をめぐる医療・社会 (4) 中期中絶を夫婦の問題として再定義する医療者の実践とそのロジック |
| 3. 学会等名 第96回日本社会学会 |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 齋藤圭介 |
| 2. 発表標題 夫婦の問題として再定義される中絶 出生前診断を経た中期中絶をめぐる医師のロジックに着目して |
| 3. 学会等名 国際ジェンダー学会 (医療とジェンダー分科会) |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Keisuke SAITO |
| 2. 発表標題 Assisted Reproductive Technologies Prompt Male Subjectivity in Reproduction: Issues and Controversies Surrounding Elective Abortion |
| 3. 学会等名 XX ISA World Congress of Sociology (国際学会) |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 佐野敦子 |
| 2. 発表標題 アフター・メルケルのジェンダー平等推進：ドイツのジェンダー関連施策の最新報告 |
| 3. 学会等名 立教大学ジェンダーフォーラム 第91回ジェンダーセッション (招待講演) |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 佐野敦子 |
| 2. 発表標題 デジタル化時代の民主主義 ドイツの妊娠中絶法制改正の動向から考える課題 |
| 3. 学会等名 九州大学第5回社会包摂デザイン研究会（招待講演） |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 佐野敦子 |
| 2. 発表標題 中絶をめぐる医療・社会（1）ドイツにおける女性の権利と人工妊娠中絶法制の議論との比較の視点から |
| 3. 学会等名 第96回日本社会学会 |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Atsuko SANO |
| 2. 発表標題 How Do the ICT(Technology) Affect to the Discourse on Reproductive Health Rights: A Case Study of Germany and Japan |
| 3. 学会等名 XX ISA World Congress of Sociology（国際学会） |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 佐野敦子 |
| 2. 発表標題 人工妊娠中絶をめぐる社会運動と法制度 日・独・英・アイルランドの女性の中絶経験の表現と社会運動 「女性の自己決定と中絶のスティグマ化を巡って ドイツにおける妊娠中絶法制改正の議論 ドイツの政権交代と中絶を行う医師の声からの考察」 |
| 3. 学会等名 第49回日本保健医療社会学会大会 |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 二階堂祐子 |
| 2. 発表標題 アイルランドにおけるリプロダクティブ・ヘルス/ライツと国民投票運動 |
| 3. 学会等名 関西アイルランド研究会第51回例会（招待講演） |
| 4. 発表年 2024年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 二階堂祐子 |
| 2. 発表標題 中絶をめぐる医療・社会（2）胎児の状態を理由とした妊娠中断と法の運用に対する医師の考え |
| 3. 学会等名 第96回日本社会学会 |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Yuko NIKAIDO |
| 2. 発表標題 How Ireland Attempted to Avoid Stigma on Disability through the Legalization of Abortion |
| 3. 学会等名 XX ISA World Congress of Sociology（国際学会） |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 二階堂祐子 |
| 2. 発表標題 人工妊娠中絶をめぐる社会運動と法制度 日・独・英・アイルランドの女性の中絶経験の表現と社会運動 |
| 3. 学会等名 第49回日本保健医療社会学会大会 |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 小門穂、洪賢秀、柘植あづみ |
| 2. 発表標題 出自を知る権利についての考え方とドナー選択 卵子提供を受けた女性へのアンケート調査から |
| 3. 学会等名 日本生命倫理学会年次大会 |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|--------------------------------------|
| 1. 発表者名 柘植あづみ |
| 2. 発表標題 親になる条件とは 生殖補助技術の法的規制をめぐって |
| 3. 学会等名 日本社会学会（招待講演） |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Minori Kokado, Hong Hyunsoo, Azumi Tsuge |
| 2. 発表標題 What do women who try to have children using donated eggs desire?: Analyzing the open-ended responses to a survey |
| 3. 学会等名 Reconceiving Donor Conception: What are the current challenges and possibilities of responsible donor conception? (国際学会) |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Azumi TSUGE, Minori KOKADO, and Hyunsoo HONG, |
| 2. 発表標題 Consideration of reasons for accepting ART involving egg donation in Japan, |
| 3. 学会等名 Reconceiving Donor Conception: What are the current challenges and possibilities of responsible donor conception? (国際学会) |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 齋藤圭介 |
| 2. 発表標題 生殖補助技術がもたらす男性の当事者化 男性不妊と選択的中絶をめぐる論点と争点 |
| 3. 学会等名 日本社会学会（招待講演） |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 菅野棋子 |
| 2. 発表標題 医療のジェンダー化か、ジェンダーの医療化か、そして新たな潮流 - お茶の水女子大学 21世紀COEプログラム「ジェンダー研究のフロンティア」から20年を迎えて- |
| 3. 学会等名 国際ジェンダー学会「医療とジェンダー分科会」（招待講演） |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 佐野敦子, 福田節也, 白藤香織 |
| 2. 発表標題 デジタル時代におけるジェンダー平等の実現に向けて |
| 3. 学会等名 NVECフォーラムWS（日本女性監視機構：JAWW）（招待講演） |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|----------------------|
| 1. 発表者名 柘植あづみ |
| 2. 発表標題 産婦人科医の中絶観 |
| 3. 学会等名 国際ジェンダー学会 |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 佐野敦子 |
| 2. 発表標題 ドイツの妊娠中絶法制の揺らぎ新政権の『リプロダクティブな自己決定』の重視と妊娠葛藤相談のこれから |
| 3. 学会等名 国際ジェンダー学会 |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 二階堂祐子 |
| 2. 発表標題 アイルランドの妊娠中絶法立法化の議論から考える胎児条項の書き込みに対する医師の考え |
| 3. 学会等名 国際ジェンダー学会 |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|------------------------------|
| 1. 発表者名 石黒眞里 |
| 2. 発表標題 産婦人科医のキャリアと患者への対応 |
| 3. 学会等名 国際ジェンダー学会 |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|----------------------------|
| 1. 発表者名 菅野摂子 |
| 2. 発表標題 中期中絶のありようと医師の視覚 |
| 3. 学会等名 国際ジェンダー学会 |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|----------------------|
| 1. 発表者名 齋藤圭介 |
| 2. 発表標題 選択的中絶と男性 |
| 3. 学会等名 国際ジェンダー学会 |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 田中慶子、菅野摂子、柘植あづみ |
| 2. 発表標題 出生前検査を希望するのはどんな女性か 「出生前検査に関する一般男女の意識調査」から |
| 3. 学会等名 第94回日本社会学会大会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 菅野摂子、田中慶子、柘植あづみ |
| 2. 発表標題 人工妊娠中絶に対する男性の態度 「出生前検査に関する一般男女の意識調査」から |
| 3. 学会等名 第94回日本社会学会大会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 TSUGE, Azumi |
| 2. 発表標題 Famille, reproduction et genre au Japon: ce que dessine la PMA (生殖補助技術から日本の家族・生殖・ジェンダーを考える) |
| 3. 学会等名 La Cite du Genre a le plaisir de vous inviter au lancement de son cycle de conferences internationales (招待講演)(国際学会)(招待講演)(国際学会) |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 柘植あづみ |
| 2. 発表標題 「遺伝性の病気がある子どもが生まれる可能性は誰にでもある」ことをいかに伝えるか」 |
| 3. 学会等名 第45回日本遺伝カウンセリング学会学術集会 シンポジウム3 pre-conception care, 受胎前に我々はどうサポートすべきか (招待講演) |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 佐野敦子 |
| 2. 発表標題 Women empowerment through ICT: Case studies of Germany and Japan |
| 3. 学会等名 The History of Medialization and Empowerment: The Intersection of Women's Rights Activism and the Media (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 齋藤圭介 |
| 2. 発表標題 社会調査で明らかになること/ならないこと (社会・環境部会セッション 2020年度社会・環境部会賞受賞記念講演) |
| 3. 学会等名 原子力学会 (招待講演) |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 齋藤圭介 |
| 2. 発表標題 UNISA/KANTO FELLOWSHIP PROGRAM IN FOCUS |
| 3. 学会等名 ADVANCING JAPAN-AUSTRALIA KNOWLEDGE EXCHANGE IN THE 21 ST CENTURY (国際学会) |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 菅野禎子、佐藤（佐久間）りか、磯野真帆 |
| 2. 発表標題 リスク社会において“病む”ということ～不確実性の管理をめぐる患者の語り |
| 3. 学会等名 国際ヘルスヒューマニティ学会（国際学会） |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 柘植あづみ |
| 2. 発表標題 出生前検査と遺伝カウンセリング 社会的・倫理的な視点から |
| 3. 学会等名 日本先天異常学会第60回学術集会（招待講演） |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 TSUGE, Azumi |
| 2. 発表標題 I choose not to undergo prenatal tests to avoid having to make a hard choice, |
| 3. 学会等名 Association for Asian Studies in Asia Conference (国際学会) |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 TSUGE, Azumi |
| 2. 発表標題 Japan's New Law on Assisted Reproductive Technology': Why Did it Take Almost 20 years for Japan to Approve its First Law Regarding ART? |
| 3. 学会等名 Sci-Tech Asia Pluralizing the Anthropocene Colloquium (国際学会) |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 齋藤圭介 |
| 2. 発表標題 『社会学評論』は高嶺の花か？ 査読誌に投稿する執筆者の属性とその趨勢 |
| 3. 学会等名 日本社会学会第93回 |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|---------------------------------------|
| 1. 発表者名 齋藤圭介 |
| 2. 発表標題 社会学への冷笑と羨望 隣接分野からのまなざし(司会) |
| 3. 学会等名 日本社会学会第93回 |
| 4. 発表年 2020年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 齋藤圭介 |
| 2. 発表標題 理論という実践 ジェンダー理論は社会正義を語れるか(司会) |
| 3. 学会等名 関東社会学会研究例会 |
| 4. 発表年 2020年 |

〔図書〕 計10件

| | |
|----------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 菅野摂子 | 4. 発行年 2024年 |
| 2. 出版社 丸善 | 5. 総ページ数 769 |
| 3. 書名 ジェンダー事典「出生前検査・診断」 | |

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 柘植あづみ | 4. 発行年 2024年 |
| 2. 出版社 丸善 | 5. 総ページ数 769 |
| 3. 書名 ジェンダー事典「セクシュアル・リプロダクティブ・ヘルス/ライツ」 | |

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 柘植あづみ | 4. 発行年 2024年 |
| 2. 出版社 メディカルドゥ | 5. 総ページ数 228 |
| 3. 書名 「第1章 5. PGTの倫理的・社会的側面」『着床前遺伝学的検査（PGT）の最前線と遺伝カウンセリング』 | |

| | |
|-----------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 ガブリエル・ブレア著、村井理子訳、齋藤圭介解説 | 4. 発行年 2023年 |
| 2. 出版社 太田出版 | 5. 総ページ数 216 |
| 3. 書名 射精責任 | |

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 佐野敦子 | 4. 発行年 2023年 |
| 2. 出版社 春風社 | 5. 総ページ数 272 |
| 3. 書名 デジタル化時代のジェンダー平等 メルケルが拓いた未来の社会デザイン | |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 齋藤圭介 | 4. 発行年 2023年 |
| 2. 出版社 昭和堂 | 5. 総ページ数 368 |
| 3. 書名 「岡山県で結婚し、子を産み、育てる」『大学的岡山ガイド こだわりの歩き方』 | |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 東京大学B'AIグローバル・フォーラム、板津 木綿子、久野 愛（佐野敦子が共著） | 4. 発行年 2023年 |
| 2. 出版社 東京大学出版会 | 5. 総ページ数 328 |
| 3. 書名 AIから読み解く社会 | |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 柘植あづみ | 4. 発行年 2022年 |
| 2. 出版社 みすず書房 | 5. 総ページ数 352 |
| 3. 書名 生殖技術と親になること 不妊治療と出生前検査がもたらす葛藤 | |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 萩原なつ子, 森田系太郎, 相藤巨, 内藤真弓, 菊地栄, 佐野敦子, 浅野麻由, 景山晶子, 安齋徹, 原田麻里子, 藤井純一, 山口典子, 萩原ゼミ博士の会 | 4. 発行年 2022年 |
| 2. 出版社 三恵社 | 5. 総ページ数 272 |
| 3. 書名 ジェンダー研究と社会デザインの現在 | |

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 垣内国光、岩田美香、板倉香子、新藤こずえ、菅野楨子、ほか | 4. 発行年 2020年 |
| 2. 出版社 生活書院 | 5. 総ページ数 304 |
| 3. 書名 「生命倫理と母子保健」『子ども家庭福祉 子ども・家族・社会をどうとらえるか』 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|--|--|----|
| 研究分担者 | 二階堂 祐子 (Nikaido Yuko) (40831269) | 国立民族学博物館・超域フィールド科学研究部・外来研究員 (64401) | |
| 研究分担者 | 齋藤 圭介 (Saito Keisuke) (60761559) | 岡山大学・社会文化科学学域・准教授 (15301) | |
| 研究分担者 | 石黒 眞里 (Ishiguro Mari) (60833126) | 明治学院大学・社会学部・実験助手 (32683) | |
| 研究分担者 | 柘植 あづみ (Tsuge Azumi) (90179987) | 明治学院大学・社会学部・教授 (32683) | |
| 研究分担者 | 佐野 敦子 (Sano Atsuko) (00791021) | 東京大学・大学院情報学環・学際情報学府・特任研究員 (12601) | |

6. 研究組織（つづき）

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|--|---|--|
| 研究協力者 | 武内 今日子 (Tskeuchi Kyoko) (20980585) | 東京大学・大学院情報学環・特任助教 (12601) | 厚生労働省の医療機能情報提供制度のもと各都道府県が公開している医療情報サイトの検索機能を用いて、母体保護法指定医師の配置などの調査を行った。 |
| 研究協力者 | 三枝 七都子 (Saigusa Natsuko) | 東京大学・新領域創成科学研究科博士後期課程・大学院生 (12601) | 厚生労働省の医療機能情報提供制度のもと各都道府県が公開している医療情報サイトの検索機能を用いて、母体保護法指定医師の配置などの調査を行った。 |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
| | |